

2-2. これからの伊勢湾

これから伊勢湾とともに暮らしていく私たちの基本的な姿勢について考えてみましょう。

2-2-1. 伊勢湾は誰のものか

言うまでもなく、伊勢湾は、伊勢湾に生息する生物にとっての生存の基盤、「母なる海」です。私たちの見えないところで「一所懸命」に生命を育んでいる生物を今の私たち人間のエゴで一方向的に攻撃し続けても良いのでしょうか。私たち人間は共に自然に抱かれて生きるものとして伊勢湾の生態系と「共存」していくことが求められているのではないのでしょうか。

一方、私たち人間の立場に即して考えて見れば、伊勢湾は、単に、伊勢湾で漁業を営む人びとや沿岸域に住む人たちだけのものではなく、広く伊勢湾流域に住む私たち全員の「共有の資産」、「公共財」であると考えられます。なぜならば、伊勢湾の恵沢（と脅威）は広く伊勢湾流域全体で受け止められており、また、私たちの活動による負荷が最終的にたどりつくのが伊勢湾であることから、伊勢湾を良くするのも悪くするのも伊勢湾流域に住む私たち次第だからです。

更に、今の私たちは先人からきれいな伊勢湾を引き継ぎました。そして、私たちはその時々々の要請（ニーズ）に従って伊勢湾を埋立等の形で利用してきました。しかし、今後も伊勢湾に対する要請はその時々によって多様に変化すると思われれます。今の私たちだけで伊勢湾を不可逆的に改変してしまうことは許されないのではないのでしょうか。なぜならば、次世代の人たちの多様な要請をも満たせるような姿で伊勢湾を引き継ぐ責務を今の私たちは負っていると思います。私たちの子どもたち、孫たちに……。

ステップアップコーナー

環境哲学について

古代において、刑而上学的には「精神(意識)が世界の事物・事象を規定する」と考えられ、自然環境を単なる『対象』として捉えていた。その後、マルクスやフロイトの出現によって、「自然や社会によって、人間の精神(意識)が規定される」との考えが芽生え始め、そのころから自然環境問題がクローズアップされ、それ以降、社会構造と自然環境との『共生』を社会科学や人文科学と哲学的立場から模索の時代が展開された。

1972年ストックホルムの国連人間環境会議を契機に、人間中心の環境保護を、エコ中心の保護主義へと転換させた。環境破壊に対する裁判での自然物の当事者適格や動物にも権利を認める自然の権利とそれに基づく動物の解放(アニマル・ライト)、さらには、自然は相互に関連し、有機的な全体としてとらえるディープ・エコロジーの考え方が広がり、環境保護としての環境保全の理論的体系がこれらによって整えられてきた。

また、この新しい環境哲学の目標は、

- ① 有限な自然環境の中で生きていくための倫理
- ② 未来の世代を視野に入れる
- ③ 動植物を含めた人間の生存を考える

と大別できる。そしてこの目標に近づくためには、人間中心主義を超える必要があると考えられている。

そのため、現在、「自然の権利(自然の生態系にも訴訟権を認める)」、「動物の解放(利益に対する平等な配慮)」、「ディープ・エコロジー(地球全体の問題として捉えるべき)」について議論が進められている。

(参考：①大阪湾新社会基盤研究会編『環境創造事典改訂版』1997.3/②甲田烈・山元伸裕著『手にとるように哲学がわかる本』1999.12)

豆知識コーナー

公害と伊勢湾

伊勢湾流域で公害といえば「四日市公害」があまりにも有名で、「四日市ぜんそく」という名前が示すようにややもすれば大気汚染ばかりがクローズアップされがちである。しかし、漁業に関連した汚染事件、公害もあったことに留意する必要がある。

その1つとして昭和32年の「黒い水」問題がある。これは、木曾川上流の三興製紙工場からの排水により、下流のノリ漁場に黒い水が流れ込み、問題となった事件である。他県でも同様な事件が発生し、工場排水規制法の制定のきっかけとなった。この事件はその後紆余曲折を経て昭和52年になってやっと補償金支払いで解決することになる。

また、同じ昭和32年に「異臭魚」問題が発生している。これは、四日市水域で獲れたボラに石油臭がすることから問題となり、昭和35年には出荷した異臭魚が東京中央卸売り市場から返品される事態にまでなった。この事件は同年に北伊勢汚水調査対策協議会が設置され、四日市コンビナートが発生原因であるとされ、2年あまりで補償金支払で解決が図られることになった。

2-2-2. 伊勢湾とともに科学する

「伊勢湾」とは、「自然」とは、どうあるべきかを考える場合には、今までの科学的な知見を手掛かりにして考えてみるのが有効です。

私たちの先人は、長年にわたる日々の営みの中で「自然の営み（摂理）」を体得してきました。そのなかで、「そんなことをすれば海の神さまの祟りがある」、「こんなことをすれば山の神にしかられる」といった「知恵」（あるいは掟）として自然との関わり方を日々の暮らしの中で伝えてきました。改めて、私たちの先人が体得した知恵を現代の私たちは合理的に検証し、受け継いで行く必要があります。

一方、科学技術を手にした現代の私たちは、合理的な思考過程で「自然現象」を分解し、理解し、科学技術の力によって対処しようとしてきました。科学技術の進展で、「個々の自然現象」についてはある程度合理的に説明できるようになりつつありますが、自然を構成する要素は膨大でかつ相互が複雑に関連していることから、自然を「ひとつの系」として統合的に把握することは現代でも極めて困難なことです。残念ながら伊勢湾でも同じことが言えます。

従って、未だ十分に蓄積されていない科学的な知見については、長期的、継続的にデータを観測、収集し、分析し、情報提供し、伊勢湾への環境負荷の低減に資する技術開発や各種制度の整備を積極的に図っていくことが重要です。

一方、現在の伊勢湾を取り巻く多くの重い課題を考えると十分に科学的知見が蓄積されるのを待ってられないとも考えられます。そこで、今までに蓄積されてきた科学的知見をフルに活用して、現時点で最善と思われる技術や制度などを駆使して、できることから行動していくことも極めて重要なことと考えられます。

そのため、私たちは、今までに蓄積されてきた様々な科学的知見について主体的に吸収することに努めるとともに、身近な自然に接して、その先の伊勢湾で何が起きているのかを合理的に考え、伊勢湾や自然に対する理解を一層深め、日常の暮らしの中で伊勢湾や自然を「科学する心」を養っていくことがこれからの時代では求められるのではないのでしょうか。

ステップアップコーナー

適応制御 (アダプティブ・マネジメント adaptive management)

何らかの施策を行った結果のモニターをもとに、施策をより良い方向に改善していくことを通じて、適切な管理を実現することを示す。

生物を含む自然環境に対する事前の影響予測は不確実性を免れることができないとの前提にたつて、事後のモニタリングを継続し、好ましくない事態になっていると判断される時には、事業を弾力的に変更し、施策の改善を図っていくこと。(出典：三重県『宮川流域ルネッサンスビジョン・基本計画～日本一の清流をめざして 概要版』1999.1)

環境産業 (エコビジネス)

大気・水・土壌などの再生、廃棄物の再資源化、資源エネルギーの確保、野生生物や森林保護を含む自然保護を図るために、公害・環境問題をビジネス化することを示す。非営利な環境保護活動と対極をなすもうひとつの環境への取り組みとして、また21世紀における新産業の柱としても期待されている。

この環境産業は、「技術系」と「人文系」に大別される。技術系環境産業とは、資源循環及び環境の維持・保全に寄与する産業の総称で「エンド・オブ・パイプ(水質汚濁測定・防止等)」「廃棄物のリサイクル(汚泥・し尿リサイクル等)」「インテグレイテッド・テクノロジー(生分解性プラスチック等)」「クリーンエネルギー(燃料電池、節電装置等)」「エコシステム修復産業(人工なごさ等)」の5分野。

一方、人文系環境産業とは、いわゆる情報系・ソフト系といわれる範疇で、「環境コンサルティング(排出権取引制度等)」「環境影響評価(環境アセスメント等)」「情報関連(エコツーリズム等)」「金融(環境関連信託等)」といった産業で構成される。(エコビジネスネットワーク編『地球環境ビジネス1998-1999』1997.12)

豆知識コーナー

戦争と伊勢湾

科学の進歩は戦争と深い関わりがあるといわれている。伊勢湾、海の話だからというわけではないが、ここで、第2次世界大戦における日本海軍と三重県との関係についていくつかの話題を提供したい。

戦時中に三重県内にあった海軍関係の施設は多くあったが、主要なものは次のとおり。(参考：大林、西川著「三重県の百年」1993.1)

施設名	設置年月日	所在地
鈴鹿海軍工廠	昭和18年6月1日	鈴鹿市庄野町
津海軍工廠	昭和19年4月1日	津市小森
第2海軍燃料廠	昭和16年4月21日	四日市市
第2海軍航空廠鈴鹿支廠	昭和20年4月1日	鈴鹿市白子
津海軍地方人事部	昭和18年4月15日	津市
鈴鹿海軍航空隊	昭和13年10月1日	鈴鹿市白子
三重海軍航空隊	昭和17年8月1日	一志郡香良洲町

このうち、第2海軍燃料廠、鈴鹿海軍工廠などは、戦後に四日市コンビナートに、鈴鹿の大企業工場に転換されて本県経済を支えていくことになったことは歴史の皮肉ともいえる。ここでいくつかのエピソードを取り上げる。

三重海軍航空隊にはいわゆる「7つボタン」の予科練も併設され、香良洲町の総面積の約1/3の1.2km²に及ぶものであった。地元では隊の名称を「香良洲航空隊」とするよう要望書を出していたが、「猛々しい海鷲を育てる航空隊の名がカラスではイメージが悪い」として三重海軍航空隊とされた。(参考：香良洲町史)ところで、香良洲の地名の由来を皆さんはご存じでしょうか。

真珠湾攻撃の際に「特殊潜航艇」が出撃したことは良く知られている。この出撃で戦死した9人は「九軍神」と称されて戦意高揚のシンボルとなった。この九軍神の中に三重県出身(一志町)の稲垣 清兵曹長がいたことから、当時、三重県内では大騒ぎとなった。(参考：一志町史)なお、この出撃で唯一人生き残られた方が、平成の世の平成11年11月末にお亡くなりになった。

三重県には直接には関係はないが戦艦「伊勢」という軍艦があった。この軍艦は日本海軍の中でも数奇な運命をたどる。当初は「扶桑型」戦艦として建造され、一度大改装されたにも係わらず、さらに「航空戦艦」に改造された。終戦直前には特殊警護艦として倉橋島沖に係留されていたが、敵戦闘機との交戦で昭和20年7月に大破着底し終戦を迎える。「巨艦大砲」から「航空戦艦」への時代の流れに翻弄された戦艦といえる。軍艦には何故か「尾張」「三河」という名はないが、巡洋艦には「木曾」「長良」「五十鈴」「矢矧」という河川名に由来するものが見られる。(参考：原、安岡編「日本陸海軍事典」)

そう言えば、三島由紀夫の「潮騒」で、嵐の日に主人公の新治と初江が待ち合わせをした場所が「観的哨」であったことも忘れられない。

2-2-3. 伊勢湾とともに哲学する

「哲学」とは「世界・人生の究極の根本原理を追求する学問」（広辞苑）のことですが、あえて平易に言えば「私たちの生きざまを考えること」と言えます。

ひたすら経済の効率性を追求してきた私たちが、「物の豊かさ」だけでなく「心の豊かさ」も求めて、これからの時代をどのように生きていくべきかという問題は、つまるところ「人間とは何か」、「自然とは何か」、「人間と自然との関係はいかにあるべきか」という根本的な命題に集約されるのではないのでしょうか。

もし、伊勢湾が私たちの生きざまを映している「鏡」であるとするならば、まさに伊勢湾は「自然と人間との関係」を考える上で、私たちにとって避けて通れない重要なフィールド、「沈黙の教師」となるのではないのでしょうか。

私たちに様々な恵沢と脅威を与え、私たちの不要物の終着駅である伊勢湾はどうあるべきかという思いを常に寄せ、その中で、自然と人間との関係はどうあるべきか、人間はどう生きていくべきかを「哲学する」ことが現代文明の中で生きる今の私たちにとって改めて問われています。

こうした思索の延長線には、おそらく私たち人間にとって、「開発」、「振興」、「発展」、「進歩」、「文明」とはなにを意味するのかが改めて問われることとなるでしょう。また、その反語として、私たちの「自然を慈しみ、愛でる心」は一体誰に教わったのか、生物としての本能的な資質なのかが自問されるのではないのでしょうか。

科学と哲学の融合

梅原猛著『地球の哲学』では、松井孝典氏と対談し、同氏は、「自然とは、ビッグバン以来の宇宙、地球、生命の歴史を記した古文書である。」として規定し、環境問題、人口問題、食料・エネルギー問題等を「地球システムと人間圏との関係性」としてすべて同じ考え方の範疇にあるととらえている。さらに、これまでの自然科学の方法論を批判し、「自然の世界を認識する新たな方法論を開発するか、理解するとはどういうことなのか、といった哲学の部分で根本的な考え方を構築しなければならない。」としている。そのためには、科学を総動員して、様々なレベルにおける新しい関係性の哲学を生み出していく必要があると訴えている。

ミチゲーション

ミチゲーションとは、1970年代後半より米国の沿岸域開発に導入されている環境政策である。開発により損なわれる環境を、付近や別の場所で新しく再生したり、代替資源を供給することにより、トータルとしての環境への影響をゼロにしようとすることを特徴としている。

米国連邦委員会は、下表のように、定義を包括的に行っている。ミチゲーションを実行する場合は、できるだけ開発場所と同じ場所(オンサイト)での実行が望ましいが、やむを得ず離れた場所で行うオフサイト・ミチゲーションの2種類がある。そして、米国では、その隔離距離に応じたミチゲーションの規模が存在する。

しかし、我国の国土面積、沿岸域の利用状況からみて、ミチゲーションを別の場所に求めること、さらに地域社会の合意を得ることは難しい状況にある。そのため、現在、関係省庁で日本型ミチゲーションの検討が進められている。

ミチゲーション措置の分類	内 容
①回避 (avoid)	ある種の行動またはその行動の一部をしないことにより全体的に影響を避ける。
②最小化 (minimize)	ある種の行動及びその実施の程度または規模を小さくすることにより影響を最小にする。
③矯正 (rectify)	影響を受けた環境を修復、再生または回復することにより影響を矯正する。
④低減 (reduce)	ある種の行動をとっている期間中の保存及び維持により時間をかけて影響を低減または除去する。
⑤代償 (compensate)	代替的な資源または環境で置き換えるか、またはそれを提供することにより影響を代償する。

出典：大阪湾新社会基盤研究会編『海域環境創造事典改訂版』1997.3

豆知識コーナー

竜宮の乙姫の元結いの切り外し

アマモは根茎を噛むと甘みがあることから名づけられたが、しなやかな葉が優雅に波間にゆらめく姿から「リュウグウのオトヒメのモトユイのキリハズシ」という別名も忘れがたい。東京湾でアマモはツルモ、コアマモはニラモと呼ばれていた。(出典：加藤真『日本の渚』)。それにしても、なんとも風情のある名前を先人は考えたものである。

伊勢の浜荻

万葉集に「神風の伊勢の浜荻折りふせて……」と謡われている浜荻であるが、俗にいうアシの異称とされている。このことから「難波の葦は伊勢の浜荻」という言葉が生まれ、所変われば物の名称も異なることを差す意味に使われていた。

船参宮

もとの東海道は、伊勢の南端を「百船の度会(ももふねのわたらい)」と呼んだように、伊勢市の大湊から伊勢湾口の島々を経て、伊良湖岬に渡るのが東国へのルートだった。また、伊勢神宮に参宮する方法として、昔は多くの人が船を使って大湊まで出かけていた。このように、物・人の交流とともに、信仰の上でも伊勢湾は交通の要衝として利用されていた。

民俗学と伊勢湾

日本(民俗)学をつくった柳田國男が、学生時代に伊良湖岬で見つけた「椰子の実」から、島崎藤村の詩が誕生したし、晩年の『海上の道』へと結実したことは有名である。また、折口信夫が、大正元年に大王崎にたつて、海の彼方に、日本人の魂の原郷「妣ガ国(ははがくに)」や「常世」を想念したように、伊勢湾は、日本人の神観念を思い起こさせる母胎なのである。いわゆる精神や観念の「甦り」や「啓示」にとって、なくてはならない日本唯一の海だと言える。(出典：伊勢湾研究会編『伊勢・三河湾再生のシナリオ — 海と人間の共生を求めて —』1995.6)

2-2-4. 日本再生のモデル「伊勢湾」

現在、日本がおかれている時代環境としては、「進行中の世界文明の変化は、通常の『進歩』や『高度化』ではなく、新たな歴史的発展段階を創るもの」であり、「近代工業社会を超越して、新しい多様な知恵の社会に至る転換である」と認識され、日本の「経済社会の『あるべき姿』」においても、経済構造や経済活動だけではなく、新しい経済社会の根底をなす条件、目標、概念および価値観についても明確にしておくべきであろう」とされています（平成11年8月閣議決定「経済社会のあるべき姿と経済新生の政策方針」より）。

伊勢湾とともに哲学し、科学することによって、これからの時代を私たちはどのように生きていくべきかを考えることは、今後の日本の「あるべき姿」そのものを考えることに連なると考えられます。

東京湾、大阪湾では近代工業化の追求の過程で、ほとんどの海岸線を埋立等により人工海岸にしてしまいました。ようやく内湾・沿岸域の持つ「価値」に気づきはじめ、多くの労力と費用を費やして人工的に「自然的環境」を創造しようとしています。しかし、あまりにも失ったもの、「負の遺産」が大きいと言えるのではないのでしょうか。

一方、伊勢湾でも多くのものを失いましたが、まだまだ「自然」が多く残されています。今後、伊勢湾と私たちがどのような関わり方をしていくのかを問い続け、更に、自然と人間との関係、これからの人間の持つべき「価値観」を問い続けていくことができれば、「伊勢湾と私たち」は「日本のあるべき姿のモデル」になっていく可能性を大いに秘めています。その意味からすれば、日本のあるべき姿のモデルになるかどうかは、これからの私たちひとりひとりの知恵と行動にかかっています。

表. 三大湾の現況

	伊勢湾(広義)	うち三河湾	東京湾	大阪湾	備考
海岸線延長(km)	660 ¹⁾	322 ¹⁾	776 ¹⁾	630 ¹⁾	
水域面積(km ²)	2,342 ⁴⁾	604 ²⁾	1,160 ³⁾	1,400 ³⁾	()は水面積に対する割合
-10m以浅面積(km ²)	620(26%) ³⁾	302 ⁴⁾	360(31%) ³⁾	140(10%) ³⁾	
埋立面積(km ²) (昭和20年8月～ 平成3年3月)	79(13%) ³⁾		157(26%) ³⁾	85(14%) ³⁾	()は全国比
平均水深(m)	16.8 ⁴⁾	9.2 ²⁾	38.6 ³⁾	27.5 ³⁾	伊勢湾は伊良湖岬から鳥羽市を結ぶ北側の海域
容積(億m ³)	394 ⁴⁾	55 ²⁾	621 ³⁾	440 ³⁾	
流域面積(km ²)	17,675 ⁶⁾	3,624 ⁵⁾	7,540 ³⁾	5,737 ³⁾	
流域人口(千人)	10,317 ⁷⁾	2,432 ²⁾	35,530 ³⁾	19,340 ³⁾	

<出典>

1) 建設省河川局編『海岸統計』(平成10年度版)

2) 伊勢湾研究会『伊勢・三河湾再生のシナリオ — 海と人間の共生を求めて』1995.6

3) 運輸省第三港湾建設局『大阪湾環境図説』1996.3

4) 日本沿岸海洋誌(1985, 日本海洋学会)、流量年表(1990, 建設省河川局)、水路図(1984, 海上保安庁水路部)、海域環境創造事典(1994, 沿岸域環境研究所)等より作成

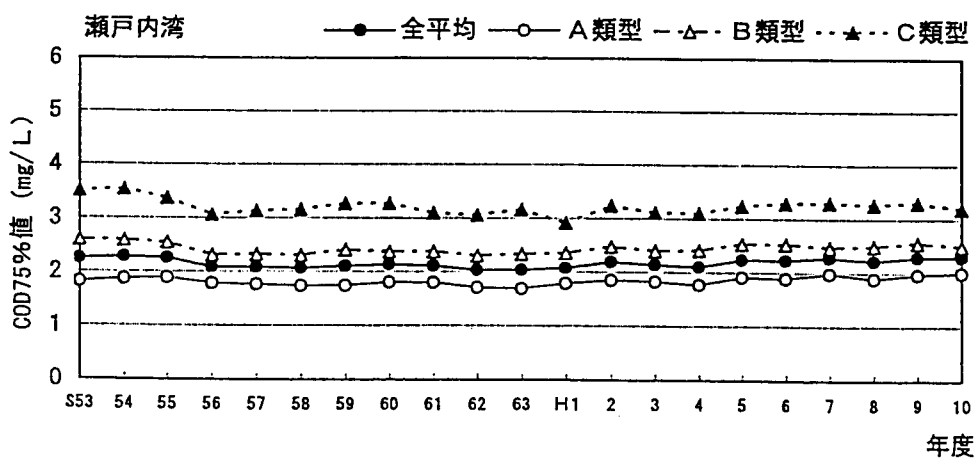
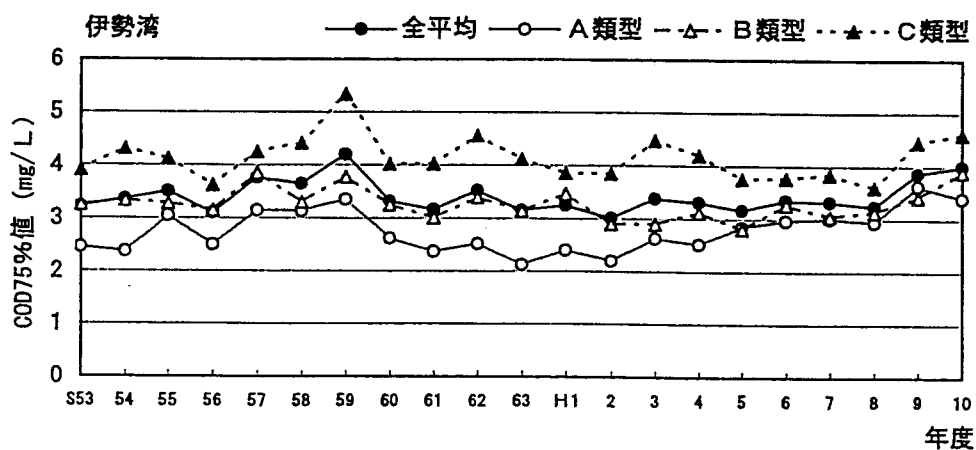
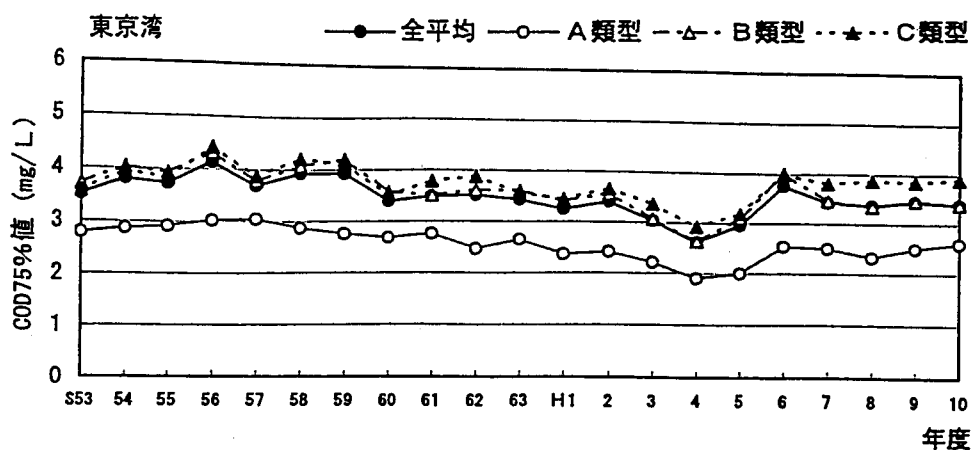
5) 西條・宇野木 1979

6) 平成8年10月1日現在「全国都道府県市区町村別面積」

7) 平成10年3月31日住民基本台帳人口

注1) 原則として、各湾の範囲は、東京湾は剣崎から洲崎を結ぶ北側の海域、大阪湾は明石海峡(明石市東境界)・紀淡海峡(和歌山県界)・淡路島及び本州で囲まれた海域で、海岸線延長には、淡路島を含む。伊勢湾は伊良湖岬から神前岬を結ぶ北側の海域。

注2) 三河湾の流域人口は1990年、東京湾・伊勢湾の流域人口は1995年



出典：環境庁資料
 図. COD75%値の推移

ステップアップコーナー

環境基本計画

環境基本法に基づき平成6年12月に国が定めた「環境基本計画」に、次のような一節がある。
 「我々は、健全で恵み豊かな環境が人間の健康で文化的な生活に不可欠であることにかんがみ、環境の恵沢を現在及び将来の世代が享受できるようにしていかねばならない。同時に、人類共有の生存基盤である有限な地球環境は、将来にわたってこれを維持しなければならない。その際には、自然の摂理と共に生きた先人の知恵も受け継ぎつつ、現代の文明のあり方を問い直し、生産と消費のパターンを持続可能なものに変えていくことが肝要である。

～ 第2部 環境政策の基本方針 第1節 基本的考え方 ～